

多民族社会形成の人口史 I

——マレー半島スランゴールとペラク——

坪内良博

Formation of a Pluralistic Society

——Historical Demography of the Malay Peninsula, Part 1, Selangor and Perak——

TSUBOUCHI Yoshihiro

Abstract : Malaysia is an example of a pluralistic society. This report is an attempt to trace the process of its formation from the viewpoint of historical demography. The cases of Selangor and Perak are described and analyzed in this report. These two states were incorporated in the Federated Malay States, which were heavily influenced by the development policy of the British colonial government. Immigration by Chinese and Indians was an important feature. Figures obtained from the census taken every ten years neglect subtle fluctuations, while the estimated population printed in the annual reports sometimes does not represent reality because of the simplistic method of estimation. Descriptions and statistics which appeared in the annual reports for these states published from the late nineteenth century were carefully documented. Immigration figures and vital statistics are combined with the impression of contemporary colonial officials to show a dynamic and more or less fluctuating population change in the period 1885–1939.

1. はじめに

マレーシアは今日の東南アジアにおいて典型的な多民族国家として特徴付けられる。現在のマレーシアはマレー半島の諸州とボルネオ島のサバおよびサラワクから構成されるが、いずれも多民族社会としての性格を持つ。サバおよびサラワクにおいては、多様な土着諸民族に加えて華人の存在が顕著である。マレー半島では、半数強を占めるマレー人を主体とするイスラム教徒と外来の華人およびインド系民族が住民の大部分を構成する。多民族国家の形成は、それぞれの生活圏を保持してきた複数の民族が、一定の境域すなわち国境の中に組み入れられたことを契機とする場合と、一定の境域の中に複数の民族が流入することによって形成された場合に大別される。実際にはこれらの二つの局面は輻輳するが、前者はインドネシア、後者はマレーシアに顕著である。マレーシアとくにマレー半島で

は19世紀後半以降の植民地形成の過程が、多民族国家形成のもっとも重要な契機となった。ここではこの過程を地域ごとに観察し、マレー半島の多民族化における地域性と共通性とを人口史的に記述分析することを目標に一連の作業を行う。本論ではマレー諸州の中からまずスランゴールとペラクを取り上げる。両州はいずれもマレー半島西海岸に位置し、シンガポール、マラッカ、ペナンなどの海峡植民地に続いて、英国による植民地化の過程に組み込まれ、錫、ゴムなどの生産の増加とともに、中国、インドからの大量の労働者をいち早く受け入れたという意味で、植民地的生産の場として典型的な姿を示すと考えられる。

19世紀中葉においてペラクが25,000 (Low 1849, 606–607) ないし35,000 (Newbold 1839, 418–419) の人口を擁していたのに対し、スランゴールは3,000 (Low 1849, pp. 606–607) ないし12,000 (Newbold 1839, pp. 418–419) に過ぎなかった。1947年時点において、ペラクの面積は7,890平方マイル(20,400平方キロメー

トル), スランゴールは3,166平方マイル(約8,200平方キロメートル)であった(1947年センサス報告, p. 136)。総面積と利用空間の大きさが必ずしも対応しないとしてもペラクはスランゴールの約2.5倍の面積を有するので、人口密度の観点からは両者に大きな差はない。人口規模が小さく人口密度も低いという意味で、いずれも小人口状況を呈していた。人口密度は高めに計算しても両州とも1平方キロメートル当たり2に達しなかった。

ペラクとスランゴールの人口がこの時点でそれぞれどのような民族構成を有していたかは明らかではない。スランゴールにおいて人口の民族構成が示されるのは、1886年のことで、総人口60,000の内訳は以下のようになる(ARS 1886, pgh 92)。

ヨーロッパ人およびユーラシアン	100
サカイ(原住民)	900
インド人	1,000
マレー人	18,000
華人	40,000
計	60,000

1887年に簡単な人口センサスが行われ、同年末の人口総数は97,106であった。下記の数値は1887年における民族別人口を示す(ARS 1887, pgh 92)。

ヨーロッパ人	156
マレー人	21,584
華人	73,155
インド人	1,261
原住民	950
計	97,106

スランゴール人口に関して上述の数値から分かることは、半島の土着住民であったはずのマレー人が、絶対数としても割合としても少ないことである。しかも1886年の年次報告書における記述では、この時点でのマレー人人口18,000のうち3分の2に相当する12,000が蘭領インドの住民であるという(ARS 1886, pgh 91)。この時期において既に多数の華人が居住していた。錫鉱を求めてやってきた華人を中心にと考えられ、1887年の数値を採用すると、華人の割合は75.3パーセントに達している。インド人はまだ少なく、彼等の大量の来住はより後のこととなる。1895年にはスランゴール人口は華人100,000を含んで150,000に達する(ARS 1895, pgh 32)。1896年人口は160,000を超えている可能性があり、その3分の2が華人であると報告されている(ARS 1896, pgh 43)。

スランゴールと比較した場合、ペラクではマレー人人口の大きさが顕著であった。1879年においてマレ

ー人は、奴隷3,050人を含んで59,682人で、総人口80,984の73.7パーセントを占めていた(ARP 1891)。10年後の1889年には総人口が194,801となり、この間に華人が20,373人から98,304人に増加したために、マレー人にも増加が認められるものの、総人口に対する割合は43.7パーセントに過ぎなくなる(1947年センサス付表)。1890年にはペラク総人口212,997に対して、マレー人は100,667で、47.3パーセントとなっている。1890年の数値は1889年の「おおまかなセンサス」によるものよりは高い精度を持つとみなされており、年次報告書にはこの時点でマレー人の数が華人を上回っていることに対する満足が表明されている(ARP 1890, pgh 61)。上述の数値から想定できることは、華人が大幅に導入されたのはペラクでは1880年代であったということである。

導入された華人はペラクでもスランゴールでもこれまでのところ住民としては10万人に達しなかったが、従来の小人口構造が華人の割合を突出させることになった。後に重要な役割を演じることになるインド人は、1879年のペラクでは837人に過ぎず、1889年には「その他」の中に埋没しているが、翌1890年には14,955人弱が記録されている。1890年の別統計には、調査の困難さのために実際の数よりも少ないと注記しながら原住民人口5,895人が記載されている。(ARP 1890, pgh 61)。彼らが一般人口の範疇から除外されていることは、植民地行政のあり方を物語るものとして興味深い。

半世紀後の1939年にはペラクの総人口は約95万人、スランゴールは約67万人と、4倍ないし6倍に達することになるが、この変化がどのような社会増と自然増に依存しているかをできる限り克明に記載することにしよう。

2. センサス人口の民族別構成

スランゴールとペラクにおける各センサス年次の民族別人口およびその総数に対する割合は表1ようになる。マレー人、その他のマレーシアン、華人、インド人、ヨーロッパ人、ユーラシアン、およびその他に大別されたそれぞれの州の人口が、1891年から1931年に至る40年間に全体として著しい増加を示したことが明らかである。人口増加を民族別に観察すると、最も土着性が高いと想定されるマレー人が着実な増加を示しつつも、全体に対する割合を低下させていく過程が明らかとなる。東南アジア域内から移動した人々

表1 センサス人口 スランゴールおよびペラク

スランゴール								
	総人口 (%)	マレー人 (%)	その他のマレーシアン (%)	華人 (%)	インド人 (%)	ヨーロッパ人 (%)	ユーラシアン (%)	その他 (%)
1891	81,592(100)	23,750(29.1)	2,828(3.5)	50,844(62.3)	3,592(4.4)	190(0.2)	167(0.2)	221(0.3)
1901	168,789(100)	34,248(20.3)	6,392(3.8)	109,598(64.9)	16,847(10.0)	511(0.3)	580(0.3)	613(0.4)
1911	294,466(100)	45,474(15.4)	19,588(6.7)	151,172(51.3)	74,079(25.2)	1,389(0.5)	1,257(0.4)	1,507(0.5)
1921	401,103(100)	63,995(16.0)	27,826(6.9)	170,726(42.6)	132,561(33.0)	2,470(0.6)	1,598(0.4)	1,927(0.5)
1931	533,535(100)	64,436(12.1)	58,502(11.0)	241,496(45.3)	155,960(29.2)	2,806(0.5)	2,138(0.4)	8,197(1.5)
ペラク (Dindings を含む)								
1891	217,869(100)	99,069(45.5)	7,324(3.4)	95,277(43.7)	15,143(7.0)	372(0.2)	297(0.1)	387(0.2)
1901	333,778(100)	134,263(40.2)	10,771(3.2)	151,192(45.3)	35,037(10.5)	674(0.2)	594(0.2)	1,247(0.4)
1911	502,359(100)	159,121(31.7)	44,670(8.9)	219,435(43.7)	74,771(14.9)	1,451(0.3)	850(0.2)	2,061(0.4)
1921	611,169(100)	190,901(31.2)	53,369(8.7)	227,602(37.2)	134,215(22.0)	2,078(0.3)	990(0.2)	2,014(0.3)
1931	785,660(100)	215,446(27.4)	64,801(8.2)	332,584(42.3)	163,940(20.9)	2,386(0.3)	1,286(0.2)	5,217(0.7)

マラヤセンサス報告 1947, 付表による。

を含むと考えられるその他のマレーシアンの割合はペラクで1911年に著しく増加しその後横ばいに移るのに対し、スランゴールでは1931年に急激な増加が見られる。華人は1901年までは顕著な増加を示すが、1921年にかけてスランゴールではマレー人と同様全人口に対する割合の低下がみられ、ペラクでは割合が横ばいとなる。そのなかで1921年における割合の低下が著しい。1921年における華人総数は1911年に比して増加を示しているが、華人男子に限定すると、表1には記載されていないが、スランゴール、ペラクともに減少が観察されるのである。1931年には再び華人の割合の上昇が見られる。インド人はスランゴール、ペラクにおいて、初期においては比較的少ないが、着実な増加を示し、1921年に華人の割合が低下するのに対して、この民族としては総人口に対する最大の割合を示した。ヨーロッパ人は総人口に対しては微々たる割合に過ぎないがその増加は著しい。特にスランゴールにおけるヨーロッパ人の数は1911年時点でペラクを凌駕するようになった。ヨーロッパ人に対するユーラシアンの比率がスランゴールにおいてペラクにおけるよりも相対的に高いことは興味深い。

スランゴールとペラクにおける人口の民族的構成の変化は上述のように複雑な様相を示している。この地域における開発の進行とともに各民族が独自の動きを示し、民族別割合はその結果であることを認識する必要がある。

3. 年次報告書における人口記載

マラヤ各州の年次報告書には多くの場合当該年次の推定人口が記載されている。各年の動きを把握するた

めには一見最良の資料を提供している。また、出生数と死亡数が記載され、推定人口に基づく出生率と死亡率が計算されている。移動に関しても出入者数が記載されることがある。しかしながら、これらの数値に関しては、当時から問題があることが認識されていたように見える。

年次報告書を執筆した植民地官吏は、人口推計値の信頼性が欠如することにしばしば言及している。若干の例を示すと以下のとおりである。スランゴールに関しては、次のような記述がある。

1890年 数値が推測的なものであるから州人口に関する数値を印刷することは無用である(ARS 1890, pgh 35)。

1909年 次期センサスが行われるまで人口数は憶測レベルにとどまるので、出生および死亡の人口比計算は試みないほうが良い(ARS 1909, pgh 101)。

1932年 州人口の数値は、幾何級数法(geometrical progression)によって1931年センサス数値から1932年年央値が算出された。かなりの数の華人およびインド人が帰国したので、修正された数値は先回のセンサス値よりも低いものと思われる。しかしながら、この計算方法は過去に用いられ、また半島中で用いられている方法なのでこの報告を採用し続ける(ARS 1932, pgh 16)。

ペラクに関しても以下の記述を拾い出すことができる。

1899年 半数以上が華人からなる推定人口は、1898年の273,000に比して295,000であった。しかしながら、信頼の置ける統計がないのでこれらの推定はおおよそのものと考えられるに過ぎない(ARP 1899, pgh 45)。

1900年 年末にまとめられる信頼度がより低い数値よりも、1901年3月に実施された最近のセンサス数値を引用の方が満足度を高くするであろう。これらの報告によるとベラク人口は328,801を数える。1899年末には295,000であった。しかし、後者の数値は概数としてのみ受け入れられるものである(ARP 1900, pgh 74)。

1910年 州人口は397,000と推定される。しかしこの数値はかなりの保留つきで受け入れられねばならない(ARP 1910, pgh 30)。

1918年 年央推定人口は605,964で、華人262,795、マレー人237,746、インド人99,938であった。これらの数値には余り信頼をおくことができない。二つのセンサス間の増加が規則正しく維持されているという仮定に基づくからである(ARP 1918, pgh 33)。

1919年 人口は622,403と推定される。(華人269,492、マレー人243,433、タミル人103,816)。しかし、推定は1911年センサスの数値を基礎にして一定の増加率を適用したもので、おそらく低すぎるものである(ARP 1919, pgh 71)。

1932年 公的な方法(幾何級数法)で推計された人口は、年央人口790,131で、この数値が死亡率その他の計算に用いられた。しかしながら、人口はずっと少なく、1932年末には730,000まで減少した可能性がある(ARP 1932, pgh 14)。

マラヤ各州において、植民地官吏はかなり早い時期から出生と死亡の把握を試みており、年次報告書において推定人口の記載を欠いていても、「人口」の見出しの下に出生数と死亡数だけが記録されている場合がある。しかし、出生統計や死亡統計の不備を認める記述も多い。スランゴール年次報告書からいくつかの指摘を引用する。

1887年 出生および死亡の記録を警察がとっているが、入手された統計は公的統計用には完全ではない(ARS 1887, pgh 93)。

1890年 出生、死亡の登録に関する適切な制度はまだ導入されておらず、警察あるいは村長への報告は自発的なものであるに過ぎない(ASR 1890, pgh 35)。下記の表(省略)は本年中に警察または土着村長に報告された出生および死亡数を示す。しかしながら、これらの数値は、もちろん、年内の州内での死亡数を大体でさえも示すものではない。病院で死亡した者を含まず、またそれと同数の華人が鉾山や遠隔地ジャングルで死亡したと思われるが、これらについて政府に報告が届くことはないのである(ARS 1889, pgh 69)。

1895年 しかし記録のシステムはなお非常に不完全で、これらの数値は実際の出生、死亡率を示すものとして信頼することができない(ARS 1895, pgh 34)。記録された出生数は2,820、死亡数は8,303であった。しかしながら、これらの数値が完全な報告と考えるのは安全ではない。事実の発生、特に遠隔地の土着人口の出生は地方の官庁に通知されない場合が多いのである(ARS 1895, pgh 93)。

1907年 登録官によれば年間の出生数は3,188で、約半数がマレー人であった。地方からの報告数値が次第に増加してくることは発生の通知が必要なことが一般に理解されつつあることを示唆している(ARS 1907, pgh 97)。

ベラク年次報告書には、出生・死亡統計の不備に関する記述は比較的少ないが、それでも次のようなものが見出される。

1905年 出生および死亡の登録システムは非常に複雑なものなので、本官はこの問題を審議し改善策を示すべく委員会を任命した(ARP 1905, pgh 16)。

1930年 出生数はベラクの記録では最多で、出生率はなお上昇中である。これは、ある程度は、過去2年の間に出生届に関する注意がより払われるようになったためであろう(ARP 1930, pgh 109)。

出入者の統計が入手できれば実際の動きに即した人口推計を行うことができることは当時の植民地官吏にも分かっていたが、出入者を把握することは実際には困難であった。年次報告書における記述がそれを物語っている。スランゴール年次報告書には以下のような記述が見出される。

1890年 海路による華人到着および出発に関する海岸の発着所の報告にいくらかでも信頼が置けるとしたら、到着、出発ともにさらに減少があった。しかし、汽船および鉄道による交通の増加、米輸入の増加、満足の錫輸出を考慮すると、華人の移入、移出に関するクランの統計は受け入れることができない。本年は信頼できる報告を記載することができない。また、これまでの報告も粗い概数とみなされねばならない(ARS 1890, pgh 104, 105)。

1903年 数値は州の港を発着した者を扱うのみで、陸路を経由した者は数えていない。これまでは、一つの港以外から州に出入りした数は取るに足らなかったが、北はベラク、南はヌグリズンピランを結ぶ鉄道の開通が事情を完全に変化させ、これらの報告を不完全なものにしてしまった(ARS 1903, pgh 65)。

1905年 今や信頼が置けるとは考えられない人口、

入境・出境推計は記録しない。かつて州への出入り口が水路または道路のみであったときは、民衆の動きを注意深く調べることにより、比較的正確な数値を得ることができた。数千の人々が鉄道で出入りするようになるとこの種の旅客を除いた計算は不正確かつ誤解を招くものとなる (ARS 1905, pgh 95)。

1906年 陸路による到着および出発数に関する情報の欠如のため、州人口推定は行うことができない (ARS 1906, pgh 92)。

1916年 1916年に海路で州に入った華人は26,867人で、1915年には17,114人であった。海路で州を去った者は15,757人あった。多くの華人が鉄道や道路で旅をするので、これらの数値はあまり価値がない (ARS 1916, pgh 51)。

1917年 鉄道で州に出入りする華人の数が入手できないので、誤解を避けるために海路で出入りした者の数は省略する (ARS 1917, pgh 62)。

ペラクについても若干の記述を引用する。

1889年 報告はポートウェルド (Port Weld) およびトロックアンソン (Tolok Anson) においてのみなされている。しかし、多くの移民特にマレー人は数多くのより小さい港に入る (ARP 1889, pgh 59)。

1890年 昨年の港湾統計は、到着 67,637, 出発 62,188 で、到着過剰 5,449 であった。1889年には、到着 72,025, 出発 58,952 であったから、昨年の移民による増加は相対的に少なかった。しかしながら、これらの数値はラルート (Larut) およびロウアーペラック (Lower Perak) の港で取られたもののみであり、他に、海岸沿いおよびプロビンスウェルズレイ (Province Wellesley), ケダー, パタニー, パハンおよびスランゴールとの内陸境界沿いに多くの出入場所がある (ARP 1890, pgh 63)。

1904年 諸港およびクリアン (Krian) における移動報告によると、すべての民族を合わせて約 237,000 人が州に到着した。約 17,000 人の移入超過であった。スランゴールとの州境については報告がない (ARP 1904, pgh 16)。

1908年 政府に提出された入境、出境報告に重要性を認めることができないので、ここに引用しない (ARP 1907, pgh 18)。移民報告は信頼できない (ARP 1908, pgh 25)。

移民が出入りする港や道路が多く把握が困難であったこと、20世紀に入ると鉄道が移動を加速し、しかも移民の把握を不可能にしたことが分かる。

4. 推定人口の動き

マラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究所において、年次報告書に記載された統計数値を丹念に収録した膨大なデータベースが作成されている。ここでは、まずこのデータベースに収録された1895年以降の推定人口と出生数および死亡数を、スランゴールとペラクについて表示する (表2参照)。推定人口は、スランゴールおよびペラクにおいて、それぞれ若干の波動を示しつつも急激な増加を示している。既に指摘した事情からこれらの数値は注意深く扱われねばならない。

1934年を中心として両州の人口が同時に一時的な下降を示すことが観察される。これは1930年代に深刻になった不況の影響と見る必要があるが、不況の労働人口に対する影響は1932年に発現している筈であり、推定値においては人口減少の開始時期に関して遅れがみられる。1931年のセンサスが信頼できるならば、このことは1934年に先行する2年間の推定人口が疑わしいことを示唆している。このように変動期の推定人口の値には問題がある。

スランゴールおよびペラクの年次報告書において、ある時期にはこれまでの増加率を将来について適用する方法が用いられたことが分かっている。この場合、不況による人口流出が生じてても、推定人口値だけは増加し続ける。このような推定値が次のセンサス時に修正されると、見かけ上急激な人口変動が出現する。移動統計を用いた社会増と出生・死亡統計を用いた自然増による推計法は、統計の不備あるいは過少記録のために極めて限定的にしか利用できない。

出生と死亡に関する統計の問題点は既に指摘したとおりであるが、これらに関する数値は、過少申告はあっても少なくとも推測を含まないという長所がある。出生数と死亡数が人口の動きを直截的に反映しているという観点から、推定人口が過大に向かっているか、過少に向かっているかを判定する指標として利用することができる。もっとも、出生数は当時多数を占めていた单身男子の動きに対して鋭敏に反応するとはいえず、また、死亡数は流行病に対して過敏に反応する場合があるので、平常の人口増減だけの指標とはならないという欠陥がある。これらを利用して推定人口に対する修正値を連続的に提供することは困難であるが、総合的な判定によって人口増減の方向性を示唆することはできる。

出生数、死亡数がともに減少している年次において

表2 推定人口, 出生数, 死亡数 スランゴールおよびペラク 1895-1939

年次	スランゴール				ペラク			
	推計人口		出生数	死亡数	推計人口		出生数	死亡数
	A	B			A	B		
1895	127,332	160,000	1,228	6,212	280,093		4,048	9,171
1896	136,366		1,309	6,366	280,093		4,256	10,605
1897	145,400		1,468	6,591	280,093	215,000	4,435	9,398
1898	138,673		1,582	4,893	277,461	273,000	4,583	8,198
1899	138,684		1,643	4,958	295,000	295,000	4,886	8,756
1900	149,273		1,655	7,522	328,801	328,801	5,149	14,000
1901	168,789		1,909	8,007	329,665		5,954	12,701
1902	194,649		1,919	5,907	361,345			
1903	216,920		2,202	6,689	381,500		7,026	12,090
1904	234,404		2,434	6,040	400,000		7,143	11,913
1905	240,546		2,857	6,756	400,000		8,293	12,500
1906	283,619		2,820	8,303	413,000		7,675	12,952
1907	326,642		3,188	10,177	431,000		8,565	14,009
1908	341,185		3,564	12,327	405,000		9,588	15,678
1909	354,982		3,981	9,306	396,000		9,506	12,678
1910	395,205		4,456	10,797	397,000		10,306	13,118
1911	294,035		5,036	11,903	494,057		8,946	14,026
1912	309,690		5,866	13,527	514,606		12,772	16,696
1913	310,570		6,998	13,312	542,678	531,037	12,779	15,206
1914	328,484		7,020	12,870	530,914		13,468	16,789
1915	346,678		7,332	10,275	556,647		14,548	15,979
1916	353,528		7,638	11,870	563,072		14,191	16,638
1917	366,053		8,674	12,695	589,525		17,049	19,279
1918	338,633		8,843	19,730	605,964		16,375	29,882
1919	391,103		8,889	11,500	622,403		15,310	17,151
1920	403,628		10,865	13,529	638,842		17,000	19,188
1921	401,009		10,364	11,888	599,055	552,124	16,521	16,328
1922	400,000		9,795	10,487	556,594		16,278	15,871
1923	488,373		10,120	9,933	559,386		16,274	15,613
1924	435,775		11,868	9,371	633,178		17,482	14,767
1925	446,473		13,256	10,159	646,189		17,868	15,359
1926	457,170		13,914	13,390	659,430		20,095	18,506
1927	467,868		15,892	14,117	669,931		20,333	19,738
1928	478,565		17,961	13,893	675,179		22,851	18,256
1929	489,262		18,634	13,114	685,680		23,689	17,627
1930	553,464		21,006	12,997	742,237		27,301	17,269
1931	533,197		18,998	9,367	765,989	770,864	24,071	14,641
1932	553,157		18,181	8,789	790,131		23,608	13,348
1933	571,966		17,846	8,936	812,989		25,048	15,496
1934	503,220	531,714	18,688	9,882	726,231		24,405	16,438
1935	551,580	564,470	20,391	10,129	799,281		27,867	16,048
1936	575,775	589,782			830,093		31,510	16,643
1937	617,536	649,507	23,779	11,695	879,632		32,704	17,312
1938	661,008	664,847	25,656	12,379	938,421		37,492	17,003
1939	672,459	681,370			954,084		37,100	16,148

マラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究所データベースによる。

は、人口自体の減少を想定することができる。もっとも該当する年次における住民の健康状態が良好であったかどうかと同時にチェックされる必要がある。年次報告書の中に移民や労働者の減少に関する記載があるかどうか別のチェック項目となる。また、開発の停滞は開発前線での病気の発生を減少させて死亡率の低下を伴うことがあるので、この影響をどのように評価するかも問題である。推定人口値を概観すると、上述の観点からは、スランゴールにおいて1909年、1910年、1915年、1923年、1924年、1932年、1933年、ペラクにおいて、1898年、1899年、1913年、1924年、1925年、1932年などに過大な人口推計がなされた可能性を指摘することができる。

出生数および死亡数の記録が民族別に示されることがあるので、華人やインド人の死亡数を移動による変動が相対的に少ないマレー人の死亡数と比較しながら観察すると、華人やインド人の移動を示唆する兆候を見出すことができる。年次報告書に記載された民族別出生数および死亡数を1895年から1939年についてまとめると表3および表4のようになる。華人死亡数の前年に対する比をマレー人死亡数の前年に対する比で除すことによって、華人死亡低下指数を求めてみた。この指数値が0.9より低くなった年次は、スランゴールでは、1898、1899、1908、1909、1915、1920、1923、1930、1932、1933、1936の各年である。ペラクに関しては、1912年から1921年に至るデータ欠如年次を除け

表3 スランゴール主要民族別出生数および死亡数

年次	華人		インド人		マレー人	
	出生数	死亡数	出生数	死亡数	出生数	死亡数
1895	192				930	
1896	242	4,864	34	418	959	943
1897	260	5,013	31	410	1,109	1,070
1898	259	3,368	55	483	1,210	990
1899	264	3,261	68	445	1,220	1,145
1900	346	4,585	84	1,499	1,129	1,252
1901	446	4,693	83	1,823	1,251	1,271
1902						
1903	533	4,750	115	687	1,236	1,377
1904	581	4,203	141	547	1,379	992
1905	653	4,535	202	790	1,604	1,114
1906	703	5,210	222	1,941	1,457	1,286
1907	796	5,704	292	2,626	1,625	1,340
1908	890	6,563	390	3,419	1,701	1,737
1909	898	4,861	603	2,463	1,883	1,473
1910	1,064	5,012	791	3,718	1,891	1,453
1911	1,414	5,905	885	3,956	1,875	1,373
1912	1,411	6,895	1,316	4,481	2,550	1,756
1913	1,777	6,181	2,066	4,928	2,544	1,705
1914	1,693	5,587	2,128	5,164	2,409	1,707
1915	1,850	4,267	2,207	3,838	2,519	1,769
1916	1,816	4,663	2,493	4,719	2,477	2,075
1917	2,051	5,089	2,679	4,813	2,981	2,377
1918	2,346	7,631	2,760	8,190	2,739	2,980
1919	2,280	4,924	3,152	4,640	2,478	1,550
1920	2,653	4,947	4,445	5,920	2,749	2,121
1921	2,731	4,316	3,700	5,112	2,825	1,951
1922	2,886	4,004	3,204	4,155	2,629	1,806
1923	3,101	3,892	3,322	3,574	2,630	1,986
1924	3,911	4,194	3,917	3,032	2,848	1,640
1925	4,485	4,284	4,635	3,592	2,894	1,738
1926	5,332	5,239	4,418	5,431	2,812	2,070
1927	6,545	5,945	4,939	5,771	2,964	1,789
1928	7,603	5,849	5,292	5,665	3,363	1,768
1929	8,156	5,785	5,861	4,825	3,008	1,803
1930	8,946	6,032	6,587	4,641	5,289	2,263
1931	8,518	4,439	5,549	3,125	4,743	1,741
1932	8,079	4,215	5,172	2,525	4,745	1,998
1933	7,965	4,139	4,738	2,359	4,986	2,404
1934	8,784	4,738	4,756	2,558	5,001	2,538
1935	9,912	4,810	5,367	2,870	4,954	2,404
1936	10,663	2,647	5,657	2,590	5,824	2,647
1937	11,815	4,888	5,923	3,320	5,878	2,705
1938	13,548	6,220	5,857	3,151	6,112	2,954

マラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究所データベースによる。

ば、1905、1909、1910、1931、1932、1933、1936の各年である。同様の指数値をインド人について観察すると、スランゴールでは、1899、1909、1912、1915、1917、1922、1923、1929、1930、1931、1932、1933、1936、1938、ペラクでは1896、1901、1904、1910、1922、1923、1929、1931、1932、1936、1938、1939の各年にみられる。1932年および1936年においては両州の華人およびインド人において低下が認められ、不況が人口減少を引き起こしていることが想定されるが、これらの年次には総人口の推定値には減少は現れない。華人において減少が顕著な年次（1909、1933）、インド人において減少が顕著な年次（1922、1923、1938）、スランゴールにおいて減少が顕著な年次（1899、1909、1915、1923、1933）、ペラクにおいて減少が顕著な年次（1910、

表4 ペラク主要民族別出生数および死亡数

年次	華人		インド人		マレー人	
	出生数	死亡数	出生数	死亡数	出生数	死亡数
1895	413	5,804	264	808	3,309	2,469
1896	424	6,880	184	815	3,597	2,807
1897	848	6,145	305	696	3,617	2,467
1898						
1899	576	5,213	371	871	3,860	2,580
1900	597	8,275	389	2,680	4,082	2,888
1901	823	7,392	386	2,262	4,649	2,881
1902						
1903	1,056	7,346	647	1,580	5,185	2,978
1904	1,210	7,514	602	1,163	5,151	3,030
1905	1,408	7,089	722	1,891	5,980	3,223
1906	1,418	7,532	707	1,957	5,343	3,203
1907	1,661	7,924	910	2,263	5,876	3,659
1908	1,901	8,609	1,627	3,091	6,523	3,902
1909	2,058	6,223	1,090	2,870	6,265	3,227
1910	2,092	6,056	1,063	2,747	7,063	4,252
1911						
1912	4,019	6,153	3,225	4,403	9,021	5,679
1913	4,165	5,973	3,037	3,913	8,950	5,898
1914	4,264	5,771	2,908	3,571	8,997	6,197
1915	5,026	5,505	3,177	3,538	9,158	5,641
1916	5,511	5,858	3,396	3,713	8,834	5,714
1917	6,118	7,287	3,676	4,727	10,175	6,433
1918	7,102	8,394	3,976	5,424	9,132	5,842
1919	7,872	7,513	4,698	5,113	10,156	5,560
1920	9,068	7,430	4,997	4,371	9,458	5,738
1921	9,759	7,498	5,848	4,265	10,987	5,141
1922	9,207	6,296	4,920	3,187	9,769	5,060
1923	8,857	5,457	4,527	2,491	10,108	5,317
1924	8,955	5,926	4,429	2,733	11,310	6,659
1925	9,618	6,289	4,136	2,762	10,502	7,307
1926	11,397	6,396	4,918	3,187	11,415	6,406
1927	12,673	6,281	5,279	3,161	13,446	7,143
1928	14,467	6,964	5,596	3,772	12,462	6,486
1929	16,996	7,081	5,838	3,182	14,534	6,692
1930	18,248	7,081	5,623	2,550	13,119	6,470

マラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究所データベースによる。

1931)などに注目しながら、年次報告における記事などを検討することによって、より詳しい事情が浮かび上がってくる可能性がある。

5. 労働力の移入

既に述べた統計の不備にもかかわらず、年次報告書における移民や労働者の増減に関する記述は人口動態を具体的に伝えている。特に著しい増加を記録した記事を抜粋すると以下のとおりである。

スランゴールにおいては以下のような記述がある。

1890年 スランゴールではインド人労働力の需要が恒常的にあり、主としてマドラスから供給される。主な雇用者は政府の仕事を行う道路工事者である。ネガパッチナム(Negapatam)と海峡植民地の港を結ぶ定期便が補助金を受けた汽船によって運行され、労働者の定常的な供給を確保している(ARS 1890, pgh 89)。

1898年 本年、州に入った者の総数は52,436人で、移出移民の数は49,042人であった。(中略)前年に比

して、華人移民に改善が見られたことは喜ばしい。入境移民は出境移民を3,000人上回った。しかし、さらに大きな華人労働者の流入が緊急に必要である (ARS 1898, pgh 30)。

1899年 入手可能な限りでは人口に関する報告は勇気づける性格のものであった。移民の波が再び徐々に上げ潮となってきた兆候がある。1899年の入境移民数は62,110人、出境移民数は48,195人で、差は13,915人であった。(中略) 華人移民は満足すべき程度に増加した。新規到着者は出境者を11,811人上回った。1899年には38,429人の華人が州にやってきたが、この数は1896年の数値を著しく下回るものではない。伝染病による中国からの移民制限を考慮すれば、改善は特に満足的なものである (ARS 1899, pgh 39)。

1900年 入境移民および出境移民の報告は極めて勇気づける性質のもので、長期にわたる産業人口記録における最大の増加を示すものであった。ヨーロッパ人とマレー人の動きは通常通りであったが、実際にわれわれの労働力を供給している華人とインド人の流入は過去10カ年のどの年よりも多く、記録上最大に達したとみなされる。その原因を要約すると以下のごとくである。通商の発展と労働力需要の進展、インド政府の承認と協力によるインド人労働者移民に対する奨励と便宜供与の増大、中国の諸港からの移民制限の撤廃。報告は82,373人が州に入り、57,000人が出発して居住人口が25,373人増加したことを示している。(中略) 50,220人の華人が州に入り、35,164人が去った。人口にとって15,056人の増加である。(中略) 1895年には華人到着が多かったが、1900年にはそれを700人上回っている。13,432人のインド人が到着したが、うち5,377人は公共事業およびエステートの労働のための労働者および家族であった。出発はこの半分で、州は約6,700人を得た (ARS 1900, pgh 38)。

1907年 年初における錫の高値のためにスランゴール海岸諸港への華人移民は1903年以来のどの年よりも多く、また、全体の25パーセントに達する満足すべき割合の女子を含んでいた。他方、出港者数には僅かな減少があり、年末の錫価格の下落は移民の流入に顕著な影響がなく、また、目立った流出のきっかけとはならなかった (ARS 1907, pgh 46)。

ペラクに関しては次のような記述がある。

1896年 インド人、華人、マレー人労働者の十分な供給を得ることに困難はないと報告されている (ARP 1897, pgh 30)

1899年 中国南部の検疫規制が解かれ、年末2ヵ月

間には華人移民の大量流入があった。保護官の報告によれば、2,000人以上の新家(年季契約移民)が同年中にペラクにもたらされた。(中略) 契約移民(著者注:インド人)総数は2,268人に達し、また、1,110人の移民が自由労働者として契約なしでインドから同年中に到着した (ARP 1899, pgh 46)。

労働力供給の不足のため、昨年においては移民問題がとくに重要となり、中国およびインドからの労働者供給を増加させるためさまざまな計画が立案された。(中略) 鉱業管理官の見積りによれば、ペラクだけでも、鉱業目的の既譲渡地を活用するためにさらに20,000人の労働者が必要とされる (ARP 1899 pgh 71)。

19世紀末以来、スランゴールやペラクを含むマラヤ諸州においては移民の導入が常態と考えられている側面があるが、導入数には年次的な変化があるばかりでなく、時には帰国者数が来住者数を上回ることもあった。これらが既に指摘した一時的な人口減少をもたらしたと考えられる。以下、労働者や移民の減少に関する年次報告書における目立った記述を年次順に示す。スランゴールにおいては次のような記述がある。

1890年 華人労働力供給における低下の連続は報告に明らかである。これは中国の港における現地官吏による妨害や、デリのタバコプランターとの競争などのせいとされる。この労働力輸入の下落が錫生産の顕著な増加と同時に生じたのは確かに奇妙である。可能性があるのは、錫価格がこれまでになく上昇した1888年に、スランゴールの華人資本家が、彼らが最終的に雇用できる以上、あるいは州の労働需要以上の華人労働者を導入したことである。錫における正常な価格の再確立とともに、既に開始されたあるいは計画中の新企業が放棄され、労働者の輸入は止まり、余剰労働の漸次的な脱出が始まったのである (ARS 1890, pgh 101, pgh 102)。

1908年 年末2ヵ月間に実施されたセンサスによると、前年に比して7,794人の労働者の減少があった。総数は前年の76,139人に対して68,345人である (ARS 1908, pgh 15, Mines)。

1909年 鉱業局のセンサスによると、雇用労働者数はさらに減少を示した (ARS 1909, pgh 19)。

1914年 海路で州に入った華人の数は28,631人、州を去った者の数は39,379人であった。これらの数値は記録がとられていない鉄道による出入を含まない (ARS 1914, pgh 53)。

1915年 1915年に州に入った華人の数は17,114人で

あった。1914年には28,621人であった。本年の前半には移民は禁止あるいは制限されていた。海路で州を去った者の数は17,937人であった。本年の年末数ヵ月には入境者数は出境者数をかなり上回った。これらの数値は相当数にのぼる鉄道による出入を数えていない(ARS 1915, pgh 58)。

1930年 5月に華人労働者の失業率が顕著になり、年末まで増加し続けた(ARS 1930, pgh 274)。(華人)1,002人の身体虚弱労働者が1人当たり\$15(マレー連邦政府負担)、プラス\$1(華人失業救済基金)で帰国送還された(ARS 1930, pgh 275)。ポートスウェトナムにおける年内の援助到着者(著者注：インド人)数は27,920人であった。1929年には59,159人であった(ARS 1930, pgh 276)。ポートスウェトナムの移民基地から本国送還されたインド人労働者数は1930年には31,410人であった。1929年には2,310人であった。労働局によって本国送還された労働者の大部分は失業のためである(ARS 1930, pgh 278)。

1931年 ポートスウェトナムにおける援助移民到着は、1930年の27,290人に比して67人であった。これらはすべて非募集移民で、成人52人、年少者13人、乳幼児2人からなっていた。この減少は募集が年中停止されたためである(ARS 1931, pgh 172)。ポートスウェトナムにおける非援助到着数は成人1,482人、年少者214人であった。1930年には成人4,061人と年少者307人であった(ARS 1931, pgh 173)。ポートスウェトナムの移民集合所を経て本国送還された年少者および乳児を含む南インド人は、24,759人で、1930年には31,429人であった(ARS 1931, pgh 174)。

本年の華人出国デッキパッセンジャーは20,885人であった。前年は10,817人であった。これらのうち2,132人は女子、1,584人は10歳未満の子供で、前年はそれぞれ1,659人、467人であった(ARS 1931, pgh 344)。華人入国デッキパッセンジャーは5,303人で、1930年には9,947人であった。964人が女子、269人が10歳未満の子供であった。前年はそれぞれ1,467人、456人であった(ARS 1931, pgh 345)。

1932年 ポートスウェトナムを経た華人入国移民、出国移民は2,419人および11,054人であった。1931年には3,471人および17,768人であった(ARS 1932, pgh 165)。華人入国移民デッキパッセンジャー総数は3,246人であった。(中略)これらのうち、633人は女子、194人は10歳未満の子供であった(ARS 1932, pgh 395)。

ペラクについては次のような記述がある。

1909年 保護官報告による華人移動は、州の諸港お

よびペナンへの鉄道による出発数が到着数を上回った。タンジュンマリムでは記録がとられていない。(中略)インド人移民がかなり到着し、インド人人口は増加した(ARP 1909, pgh 25)。

1914年 本年の出境者は入境者を22,111人上回った。(中略)年を二部分に分けた数値は興味深いものがある。

1月から7月	海路による人口減(華人のみ)	1,740
8月から12月	同上	7,490
1月から7月	鉄道による人口減(全民族)	3,610
8月から12月	同上	9,271
	計	22,111

年の第1期における海路入境者は14,058人であった。第2期(5ヵ月)にはデッキパッセンジャーの移入が禁止されたため2,876人のみであった。海路による減少9,230人のうち、女子は379人のみであった。月別報告によると、州からの人口移動(おそらく錫およびゴムの下降による)は年初から始まっている(ARP 1914, pgh 25)。

1915年 (華人保護局報告)2ヵ月間(9月および10月)を除けば、入境に対する出境の過剰が見られ、人口減は11,814人であった。前年は22,111人であった。入境禁止は7月に廃止された。

1月から7月	海路による人口減(華人のみ)	3,437
8月から12月	同上	1,968
1月から7月	鉄道による人口減(全民族)	10,339
8月から12月	同上	1,475

統制下における月平均減少数は1,968人で、制限解除後は689人に減少した。制限解除は移動に大きな影響を与えたとは見えない。これはおそらく中国からのデッキパッセンジャー運賃の上昇によるものである(ARP 1915, pgh 25)。

1930年 年の前半にはインド人労働者に深刻な失業状態はなかったが、継続するゴム不況のために7月以後深刻になった。次の4ヵ月間は失業者数の著しい増加が見られた。この状況は無料本国送還によって対処され、年末には正常に復した。11月3日にトゥロックアンソンに本国送還事務所が開設され、失業者や他の希望者の群に対応した。事務所は年末に閉鎖された。年内に本国送還されたインド人労働者は5,951人であった(SRP 1930, pgh 232)。

1931年 21,176人の失業あるいは病弱状態の華人が保護局によって本国送還された。このうち13,584人は失業者で、9月におけるマラヤの錫割り当て激減の結果、8月から11月の間に本国送還された(ARP

1931, pgh 270)。1931年末時点で鉱山において雇用されていた労働者は33,486人であった。1930年末は43,699人, 1929年12月には65,411人であった。1ヵ月間における最大の減少は9月の5,544人であった(ARP 1931, pgh 271)。

1932年 1932年末に鉱山で雇用された労働者数は22,777人であった。1931年末には33,487人, 1930年12月には43,699人であった。1ヵ月間の最大減少は, 1月の3,348人, および6月の2,807人であった(ARP 1931, pgh 308)。

スランゴールおよびペラクにおける移民の流入は, 19世紀末および20世紀初頭にその著しさが強調されている。実数としての増加も重要であるが, 植民地行政者の態度ないし社会風潮として, 移民労働者待望を基調とした記述が見られることにも注意したい。他方, 中国, インドなどの移民送り出し国の事情も移民数に影響していることが指摘されている。

1914および1915年, 1931年および1932年には, 第一次世界大戦, 経済不況などを背景に, スランゴール, ペラクに共通して失業と移民制限さらには現存する労働者の帰国などが顕在化し, 華人, インド人を中心に人口減少が生じたことが記録されている。鉱山やエステートにおける雇用労働者の減少は顕著であるが, 失業者のすべてが帰国したわけではない。女子の帰国傾向が男子ほど顕著ではなかったと見られることにも注意しておきたい。

スランゴールおよびペラクにおいては移民に関する統計の不備が多く, 長期にわたる観察期間を確保することができないことについては既に述べた。交通機関の発達が不十分な比較的初期の時期においてはそれぞれの州に到着した者の数が年次報告書に記されている(表5および表6参照)。スランゴールとペラクを比較できる年度は限られているが, これらの二つの州における入境者および出境者数の動きには一見共通するものがある。特に1897年総数における入境者の減少にともなう社会減に注目したい。民族別にみた場合, 社会増減の現れ方がやや複雑になる。すなわち, 華人男子においてはスランゴールとペラクともに社会減が認められるが, 華人女子ではスランゴールにおいて社会減が見られるものの, ペラクにおいては逆に社会増があった。インド人とマレー人に関しては, スランゴールで男女ともに社会増が記録され, ペラクで男女ともに社会減があった。ヨーロッパ人においてはスランゴールでは男女ともに社会増があり, ペラクでは男子において社会増が, 女子に社会減があった。このような

表5 民族別出入者数 スランゴール

年次	到着			出発		
	男子	女子	計	男子	女子	計
ヨーロッパ人						
1895			937			618
1896	932	227	1,159	703	193	896
1897	1,164	293	1,457	863	192	1,055
1898	1,171	360	1,531	820	208	1,028
1899	1,195	382	1,577	838	309	1,147
1900	1,302	366	1,668	841	310	1,151
1901	1,194	350	1,544	814	321	1,135
1902			1,447			1,365
1903			1,494			1,111
1904			1,400			1,002
1905			1,405			881
マレー人						
1895			15,678			12,105
1896	13,511	3,418	16,929	11,721	2,610	14,331
1897	11,502	3,097	14,599	10,690	2,775	13,465
1898	10,371	2,683	13,054	10,937	2,789	13,726
1899	10,953	2,725	13,678	11,040	2,817	13,857
1900	12,522	2,857	15,379	11,791	3,106	14,897
1901	11,064	2,709	13,773	9,752	2,570	12,322
1902			13,700			12,038
1903			15,455			11,497
1904			13,481			10,196
1905			12,477			10,185
華人						
1895	46,128	3,278	49,406	30,367	2,882	33,249
1896	38,100	3,783	41,883	29,958	3,216	33,174
1897	24,984	2,799	27,783	29,016	3,208	32,224
1898	26,321	3,237	29,558	23,852	2,874	26,726
1899	34,853	3,563	38,416	23,524	3,089	26,613
1900	46,300	4,384	50,684	29,859	3,749	33,608
1901	39,079	4,160	43,239	28,648	3,294	31,942
1902			44,602			28,978
1903			50,815			32,031
1904			44,041			30,537
1905			40,080			29,091
1906			37,911			
インド人						
1895			7,268			5,349
1896	7,492	1,014	8,506	5,495	740	6,235
1897	7,954	1,166	9,120	6,458	811	7,269
1898	6,280	1,055	7,335	5,588	822	6,410
1899	5,767	993	6,760	4,843	617	5,460
1900	11,312	2,146	13,458	5,920	841	6,761
1901	8,250	1,438	9,688	6,796	813	7,609
1902			8,170			7,123
1903			7,631			6,158
1904			11,449			7,979
1905			15,870			8,696
その他						
1895			1,095			1,332
1896	1,085	94	1,179	1,233	137	1,370
1897	731	54	785	1,143	192	1,335
1898	858	64	922	1,021	167	1,188
1899	1,593	128	1,716	1,079	87	1,166
1900	1,799	215	2,014	1,368	107	1,475
1901	1,759	166	1,925	1,467	99	1,566
1902			2,340			1,932
1903			1,403			1,588
1904			828			398
1905			1,313			295
1906						
総数						
1895						
1896	61,120	8,536	69,656	49,110	6,896	56,006
1897	46,335	7,404	53,744	48,170	7,178	55,348
1898	45,001	7,399	52,400	42,218	6,860	49,078
1899	54,361	7,786	62,147	41,324	6,919	48,243
1900	73,235	9,918	83,153	49,779	8,113	57,892
1901	61,346	8,823	70,169	47,477	7,097	54,474
1902			70,259			51,140
1903			76,798			52,385

年次報告書により作成

表 6 民族別出入者数 ベラク

	到 着			出 発		
	男子	女子	総数	男子	女子	総数
ヨーロッパ人						
1890	973	135	1,108	790	143	933
1891	943	123	1,066	777	114	891
1892	887	134	1,021	805	135	940
1893						
1894	581	130	711	500	143	648
1895	542	108	650	498	128	626
1896	572	113	685	482	131	613
1897	1,252	239	1,491	1,133	251	1,384
1898			1,411			1,164
1899	1,277	251	1,528	1,084	254	1,338
1900	1,449	347	1,796	1,242	321	1,563
1901			2,173			1,828
1902						
1903	3,135	819	3,954	2,865	790	3,655
マレー人						
1890	9,147	2,198	11,345	9,713	2,308	12,021
1891	8,417	2,051		7,712	1,801	
1892	9,561	2,592	12,153	8,181	2,235	10,416
1893						
1894	8,841	2,711	11,552	8,022	2,236	10,258
1895	9,279	2,735	12,014	9,390	2,585	11,975
1896	7,490	2,501	9,991	8,278	2,536	10,814
1897	6,667	2,283	8,950	7,409	2,301	9,710
1898			8,211			8,731
1899	6,403	2,179	8,582	6,073	2,011	8,084
1900	7,264	2,786	10,050	7,269	2,437	9,706
1901			41,090			36,391
1902						
1903	42,323	14,662	56,985	40,973	14,126	55,099
華人						
1890	40,141	3,626	43,767	35,057	3,496	38,553
1891	36,746	3,738	40,484	29,056	2,983	32,039
1892	46,677	4,644	51,321	29,413	3,668	33,081
1893						
1894		4,561	49,387	32,903	4,141	37,044
1895	50,767	5,213	55,980	35,324	4,763	40,087
1896	36,276	4,351	40,627	34,821	4,534	39,355
1897	27,932	4,163	32,095	29,322	3,830	33,152
1898			31,898			
1899	49,559	5,104	54,663	28,474	4,145	32,619
1900	61,876	6,796	68,672	36,839	5,471	42,310
1901			83,233			57,719
1902						
1903			193,605	150,109	13,712	163,821
インド人						
1890	9,912	1,505	11,417	9,334	1,347	10,681
1891	10,801	1,474		8,696	1,218	
1892	10,454	1,473	11,927	9,192	1,230	10,422
1893						
1894	8,820	1,261	10,081	8,122	1,195	9,317
1895	8,775	1,233	10,008	8,782	1,218	10,000
1896	8,589	1,198	9,787	8,119	1,177	9,296
1897	6,944	1,164	8,108	7,558	1,171	8,729
1898			8,174			7,683
1899	9,045	1,321	10,366	6,540	897	7,437
1900	12,273	1,937	14,210	8,119	1,206	9,325
1901			20,040			16,742
1902						
1903	27,814	6,077	33,891	27,521	6,129	
総 数						
1890	60,173	7,464	67,637	54,894	7,294	62,188
1891	56,907	7,386	64,293	46,241	6,176	52,417
1892	67,579	8,843	76,422	47,591	7,268	54,859
1893			93,960			61,316
1894	63,068	8,663	71,731	49,547	7,715	57,262
1895	69,363	9,289	78,652	53,994	8,694	62,688
1896	52,927	8,163	61,090	51,700	8,378	60,078
1897	42,795	7,849	50,644	45,422	7,553	52,975
1898			49,694			47,996
1899	66,284	8,855	75,139	42,171	7,307	49,478
1900	82,862	11,866	94,728	53,469	9,435	62,904

年次報告書により作成。

動きの中で、総数における社会減は華人男子の動きに影響されている。スランゴールとベラクの面積と人口規模の差にもかかわらず、元来人口数に差があったマレー人を除けば、この時点では人口移動の規模に大きな差がないことにもまた留意すべきであろう。

6. 社会・自然動態に基づく民族別人口推計

人口移動統計に基づく社会増と、出生・死亡統計に基づく自然増を累計して人口推計を行うためには資料が不足している。しかし、1891年から1901年に至る10カ年のベラクの統計は、期首および期末年次のセンサス人口、入境・出境統計、出生・死亡統計が比較的整っており、若干の補完による推計を挿入すれば、民族別、男女別に人口増にかかわる各要因の関与を検討することができる。表7は民族別の評価の一覧である。(注：欠落数値の補完は、1893年の各値について前後の年次の平均値を適用すること、1898年の移動に関する男女別数値について男女移動総数を前年の実績に対応して配分することによって行っている。また、各センサス人口は後にベラク領に編入されたディンディン Dindings を含み、操作上年初のものとして扱っている。)

全人口については、二つのセンサス間の人口増加は、期首人口に社会増と自然増を加えて算出された合成推定人口を僅かながら上回り、後者の基礎となった社会増あるいは自然増において記録漏れがあることを示唆している。出生・死亡登録制度が不完全なことは当然想定され、また、死亡よりも出生の届出に欠落が多いことも考えられる。しかし、出生後まもなく死亡した者は出生統計にも死亡統計にも現れない、すなわち記録された自然増加数に影響を及ぼさない可能性があること、この時代の自然増加率は定住人口においても決して高くはなかったことを考慮に入れる必要がある。合成人口が過少評価となった場合の原因は、社会増の算出のための基礎数値、すなわち入境者数と出境者数において、入境者が過少に評価されたためとみなすのがもっとも自然であろう。既に数字が与えられている出境者数についてはそれが過大評価とみなすこと自体が矛盾を含むからである。また、合成人口が過大となった場合の原因は逆に出境者が過少に評価されたためと考えると分かりやすい。既に数値が与えられている入境者数についてそれが過大とみなすこと自体が矛盾を含むからである。

以下、各民族について検討しよう。ヨーロッパ人に

表7 社会・自然動態に基づく民族別人口推計 (摘要表) ベラク

		センサス人口		センサス間 増加	社会増	自然増	動態増加	動態増加 /センサス 増加	センサス比 (1901年)
		1891	1901						
全人口	総数	217,869	333,778	115,909	154,380	-48,886	105,934	0.914	0.970
	男子	158,847	242,173	83,326	142,384	-53,153	89,232	1.071	1.024
	女子	59,022	91,605	32,583	11,996	4,707	16,702	0.513	0.827
ヨーロッパ人	総数	669	1,268	599	1,037	140	1,177	1.965	1.456
	男子	436	785	349	1,140	71	1,211	3.470	2.007
	女子	233	483	250	-65	69	4	0.016	0.490
華人	総数	95,277	151,192	55,915	117,846	-51,482	66,365	1.187	1.069
	男子	89,337	137,362	48,025	111,963	-50,705	61,259	1.276	1.140
	女子	5,940	13,830	7,890	5,883	-777	5,106	0.647	0.799
マレー人	総数	106,393	145,034	38,641	4,280	9,810	14,089	0.365	0.831
	男子	56,973	77,010	20,037	2,142	3,598	5,740	0.286	0.814
	女子	49,420	68,024	18,604	2,137	6,212	8,349	0.449	0.849
インド人	総数	15,143	35,037	19,894	13,548	-7,343	6,205	0.312	0.609
	男子	11,867	26,329	14,462	11,505	-6,237	5,268	0.364	0.651
	女子	3,276	8,708	5,432	2,043	-1,105	938	0.173	0.484

表8 民族別性別比の変化

	総人口	マレー人	その他の マレーシアン	華人	インド人	ヨーロッパ 人	ユーラシアン	その他
スランゴール								
1891	4.61	1.46	2.13	14.72	5.32	3.22	1.83	1.48
1901	4.28	1.37	2.07	8.63	4.05	2.60	1.36	1.03
1911	3.03	1.20	2.03	4.70	3.22	2.54	1.14	0.74
1921	2.00	1.18	1.56	2.50	2.13	1.87	1.14	0.97
1931	1.59	1.06	1.31	1.77	1.72	1.80	1.10	1.94
ベラク								
1891	2.69	1.13	1.44	15.04	3.62	2.41	1.40	1.53
1901	2.64	1.11	1.47	9.93	3.02	2.19	1.18	1.23
1911	2.29	1.08	1.31	5.13	2.99	2.45	1.04	0.68
1921	1.72	1.04	1.22	2.64	2.17	2.02	1.00	0.88
1931	1.54	1.01	1.23	1.99	1.84	1.79	1.05	1.45

センサス報告 1947 より作成。

については、総数において合成推定人口が期末人口を45.6パーセントも上回る。これは男子人口における合成推定人口が期末人口の2倍強になることによって生じたもので、過少評価が出境者において生じたためと理解したい。ヨーロッパ人女子においては逆に社会増が負となっており、実際に生じた人口増加は入境者の記録が不十分であったことを示唆している。華人においては、総人口、男子人口、女子人口のすべてにおいてヨーロッパ人と同様の傾向が見出される。インド人については、男子人口、女子人口ともに合成推定人口が過少となっていることに注意したい。すなわちこの時期のインド人については、男子においても入境者の把握に問題があったと考えられる。ただし、女子における把握の不十分さがより著しいのである。

マレー人に関しては、インド人の場合と同様、男子、女子ともに合成人口が過少となっている。マレー人の場合男子の過少が目立つ。地の利をわきまえているマレー人が、ベラク海岸の各所から入境することが

この原因になっている。マレー人の場合、社会増の過少評価が存在するとしても、死亡に対する出生の過剰、すなわち自然増加が人口増加に寄与している側面を軽視することができない。華人やインド人と異なり、男子人口と女子人口の均衡が相対的にとれており、また生活環境の変化も少ないところから、ある程度の自然増加が確保できたのである。

マレー人を除けば、すべての民族において男子については合成人口がセンサス人口を上回り、女子についてはセンサス人口が合成人口を上回るということは示唆的である。これが男子における出境者数の過少評価、女子における入境者数の過少評価によって説明されるとすれば、このことは、植民地官吏が労働者として入国する男子に大きな関心を払ったことと整合的である。各民族の性別比をセンサスから算出して、1891年から1931年に至る変化を表示すると、表8のようになる。男子労働力の陰に隠れて、明示的に言及されることが比較的少なかった女子人口の増加が性別の変

化として明確に捉えられることに注意したい。入国における女子の計数の不徹底、女子の滞留傾向の相対的な強さ、そして自然増加による男女均等の増加がこの背後に存在したと考えられる。

7. 自然増の評価

通常の人口動態統計においては出生数が死亡数を上回ることによって人口の自然増加が確保されている。既に述べたようにスランゴールおよびペラクでは死亡数が出生数を上回り、移民の過剰によって人口増加が実現する状態がかなり永く続いた。表6から分かるように、スランゴールの総人口において出生数が死亡数を上回るようになったのは1923年、ペラクではそれよりも1年早い1922年のことであった。死亡数が出生数を上回るのは、男子の占める割合が異常に多い人口構造のためでもある。

民族別に見た場合、それぞれにおいて男子人口の占める割合の変化の過程が異なるならば、出生数が死亡数を上回るようになる年次に差が見られるはずである。スランゴールのマレー人においては統計が入手可能な1896年において既に出生数が死亡数を上回っており、華人においては1925年、インド人においては1924年に出生数が死亡数を上回るようになった。ペラクのマレー人においても、ここで示される統計の初年度である1895年において既に出生数が死亡数よりも多く、華人においては1928年、インド人においては1929年に出生数が死亡数を上回る状況が見られるようになった。

出生数と死亡数の差は人口学的な操作においては自然増として扱われるが、男子移民を多く含む社会では注意深く解釈する必要がある。自然増がマイナスであることは、人口が減少していくことを意味する。図式的に捉えれば、流入する人口が死亡過剰を補いさらにそれを上回る数を補充することによって、この地域の人口増加が実現していることになる。全人口が、単身で一時的に滞在している部分と、結婚して既に再生産体制に入っているか将来結婚して再生産体制に組み込まれる可能性がある部分に区分されるとすれば、よりダイナミックな構造的な理解が可能となる。すなわち、前者では在住人口の死亡と流入人口による補充のみがみられるのに対して、後者では定住人口独自の自然増が問題になるのである。

女子人口が実際にはある程度の流動的出稼ぎ者を含んでいることを認めつつも、ここでは定住人口に該当

表9 スランゴール女子における出生と死亡

年次	マレー人		華人		タミル人 (インド人)	
	出生	死亡	出生	死亡	出生	死亡
1896	452	337	101	164	17	60
1897	546	398	111	160	12	62
1898	583	390	119	181	27	89
1899	607	407	119	204	24	84
1900	546	478	149	263	39	324
1901	620	460	215	264	36	447
1902						
1903	616	974	233	284	59	154
1904	638	389	241	337	75	181
1905	771	464	281	393	107	191
1906	709	545	320	390	101	459
1907	790	548	356	430	139	581
1908	822	674	399	517	204	732
1909	933	598	398	506	312	604
1910	943	591	466	548	375	1,102
1911	954	571	652	882	418	1,197
1912	1,230	724	625	839	678	1,238
1913	1,255	660	762	786	993	1,486
1914	1,203	754	747	834	1,026	1,732
1915	1,237	777	795	736	1,068	1,349
1916	1,188	949	773	824	1,241	1,724
1917	1,463	1,019	904	947	1,302	1,799
1918	1,325	1,337	1,043	1,357	1,353	2,944
1919	1,183	658	1,014	948	1,569	1,685
1920	1,387	951	1,155	1,095	2,145	2,306
1921	1,370	898	1,180	1,025	1,856	1,967
1922	1,821	828	1,253	959	1,594	1,611
1923	1,226	932	1,353	929	1,656	1,879
1924	1,358	759	1,754	1,018	1,921	1,204
1925	1,377	789	1,950	1,102	2,284	1,575
1926	1,315	985	2,383	1,343	2,232	2,426
1927	1,454	814	2,972	1,536	2,488	2,509
1928	1,677	856	3,461	1,616	2,635	2,444
1929	1,419	869	3,702	1,654	2,928	2,198
1930	2,545	1,045	4,039	1,847	3,248	2,160
1931	2,349	844	3,823	1,422	3,871	1,448
1932	2,322		3,615		2,572	
1933						
1934	2,397		4,011		2,333	
1935	2,396		4,587		2,665	
1936	2,864		4,868		2,719	
1937	2,893		5,527		2,856	
1938	2,952		6,397		2,939	

年次報告書により作成。

すると仮定してこの問題に対する検討を進めると以下のようなになる。観察対象にすることができるのはスランゴールにおける女子である(表9参照)。マレー人女子の場合、マレー人全人口の場合と同様、統計が得られる最初の年である1896年において既に出生数が死亡数を上回っている。死亡数の出生数に対する比はマレー人全人口の場合に比してより小さく、マレー人の場合でも男子において一時的な居住者が相対的に多かったことを示唆している。華人女子において出生数が死亡数を上回る最初の年は1915年であり、それが恒常化するのには1919年以後である。インド人女子においては出生数が死亡数を上回る最初の年は1924年であり、それが恒常化するのには1928年以後である。華人においてもインド人においても、再生産人口に組み

入れられないような女子が女子人口の中に存在し、そのことが女子人口における死亡数を相対的に高くしていたことは想定できる。それにもかかわらず、女子人口における再生産に組み入れられる部分は男子人口におけるよりも相対的に多かったはずである。このような状況下で出生数が死亡数を上回る時点が全人口に僅か数年先行するに過ぎないということに注意すべきであろう。ゴム園開発などに従事した一部の男子人口を除いて、マレー人が比較的安全な環境の中で生活していたために死亡率が比較的低く、自然増加が確保できたという見方が可能である。これに対して、華人やインド人の生活環境は、男女を通じて相対的に厳しく、死亡率の低下が現れ、自然増加が確保されるようになったのは20世紀に入って、10年ないし20年経過してからのことであったとみなしてもよさそうである。

おわりに

スランゴールとペラクの人口変動の観察は、植民地期のマラヤ人口が、景気の変動に鋭敏に反応しながら、激しい社会移動によって形づくられてきたことを示している。初期には高く、後にはかなり改善された死亡率も無視することができない。性比の改善が自然増加を増大させる側面も同時に進行するので事態は複雑である。本論で示したデータは、これらの状況を具体的に示しているが、事実の記述がなお不十分であったり、他の地域との比較が必要とされる側面があったりする。この意味で仮説の域を脱しない側面がある。次のステップとして、パハンやジョホールを取り上げることが有意義かもしれない。パハンは英国の直接的な植民地支配が行なわれた連邦州の一つであるが、スランゴールやペラクに比して開発の過程において後進的であった。ジョホールは非連邦州の一つとして、連

邦州とは立場を有すると同時に、シンガポールに近く開発を受け入れる基盤があった。これらの地域に関する記述の中から、既に得られた見解を補強したり、補正したりする作業が可能かもしれない。ケダー、クランタン、トレンガスなど植民地経営の中心から遠く離れた非連邦諸州との比較も興味深い。本論での作業は、必要な作業の最初の部分となるのである。

引用資料および参考文献

本論で用いた資料は、1885年から1939年の間に刊行されたスランゴールおよびペラクの各年度の年次報告書を主体とするものである。作業には、マラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究所がその研究プロジェクトの作業のために作成した年次報告書のコピー製本を使用した。また、同研究所で作成されたデータベースの一部を使用させてもらった。引用に当たっては、原則として、年次報告書の対象とする州名および年次と報告書内に記されているパラグラフの番号を示した。すなわち、スランゴール年次報告書からの引用は、ARS 1901, pgh 20, またペラク年次報告書からの引用は、ARP 1901, pgh 20のように省略した形で、引用個所に付記した。ARはAnnual Report, SはSelangor, PはPerakの省略である。

年次報告書以外の引用文献は以下のとおりである。

- Del Tufo, M. V. *Malaya, A Report on the 1947 Census of Population*. 1947
- Low, James. 1849. An Account of the Origin and Progress of the British Colonies in the Straits of Malacca. *Journal of Indian Archipelago and Eastern Asia, Series I*, Vol 3, pp. 599-617.
- Newbold, T. J. 1839. *Political and Statistical Account of the British Settlements in the Straits of Malacca*. 2 Vols. London: John Murray. (Reprinted in 1971 by Oxford University Press)

謝辞 本論のデータ収集作業の多くは、マラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究所の助力で可能となった。同研究所長シャハリル・タリブ教授、研究員杉本一郎氏をはじめとするスタッフに感謝の意を表す所である。